

日本サウンドスケープ協会
2013 年度 秋季研究発表会 プログラム

音の世界は こんなに面白い！

-最近のサウンドスケープ研究の現場から-



ごあいさつ

本年度研究発表会は、企画展「音の風景」が開催されている千葉県立中央博物館のご厚意を得て、博物館内で開催される運びとなりました。同時開催の協会創立 20 周年展「音風景の地平をさぐる」で、サウンドスケープ協会の 20 年間の多岐に渡る活動を振り返るとともに、この研究発表会「音の世界はこんなに面白い！」はその副題「最近のサウンドスケープ研究の現場から」にもあるように、まさに生の現在進行形の現場を知る絶好の機会です。このチャンスをお見逃しなく！

研究発表会実行委員長 大谷英児

実施概要

日 時：2013 年 11 月 16 日（土） 9:30～16:00

場 所：千葉県立中央博物館・講堂（〒260-8682 千葉県千葉市中央区青葉町 955-2）[Google マップ](#)

J R 千葉駅、京成千葉駅よりバス 15 分、又は京成千葉寺駅より徒歩 15 分

詳しくは http://www2.chiba-muse.or.jp/?page_id=204 をご参照ください。

申 込：不要

参加費：無料（会員は事前に協会 web より論文集をダウンロードしてご持参ください）

実施スケジュール

発表形式 A は 10 分、B は 15 分の質疑時間を含んだスケジュールとなっています。

930		開会挨拶
935	A	「夕方5時のチャイム」の公共性：山梨県富士吉田市の取り組みから 箕浦一哉（山梨県立大学/フローニンゲン大学）
1005	A	放送番組のサウンドアーカイブとしての可能性～NHKアーカイブス学術利用トライアル研究中間報告～ 小林田鶴子（共栄大学）、兼古勝史（武蔵大学・立教大学）、鳥越けい子（青山学院大学）
1035		休憩
1045	A	建築学科の学生を対象とした環境音による空間認識の訓練の試み 飯野秋成（新潟工科大学）
1115	A	公共空間の音環境デザインにおけるリアルタイム制御デバイスの導入 島橋和宏（名古屋市立大学）
1145		昼休み
1235	B	博物館でのコンサート「ミュージアムジーク」の実践と可能性 松本玲子（青山学院大学）
1315	B	コミュニティデザインのための「地域の音」コンテンツ制作の試み 笠川 芳久（拓殖大学）、工藤 芳彰（拓殖大学）
1350		休憩
1400	B	Acoustic Filmの方法と可能性 —“Scapes Series”を中心に— 柳沢英輔（国立民族学博物館）
1450		休憩
1500		スペシャルセッション 「音風景展をふりかえって 環境、人々、そして物語は紡がれる」
1600		閉会挨拶
		情報交換会

講演要旨

「夕方 5 時のチャイム」の公共性：山梨県富士吉田市の取り組みから

箕浦一哉（山梨県立大学/フローニンゲン大学）

多くの地域で防災無線設備を利用した時報の放送が行われており、地域のサウンドスケープの一定の位置を占めている。山梨県富士吉田市では 2012 年 12 月および 2013 年 7 月に、時報のチャイム音をあるロックバンドの楽曲に一時的に変更する取り組みが行われた。この取り組みは同市役所の「若手職員プロジェクト」のひとつとして実施された企画で、2009 年に 29 歳で亡くなった同市出身のミュージシャン志村正彦氏の楽曲を期間限定でチャイム音として放送するというものであった。この取り組みは市民に好意的に受け入れられたほか、遠方からチャイムを聴きに同市を訪れるファンもあった。

通常チャイム音には住民によく知られた楽曲が用いられるが、ここで採用された曲は決して多くの富士吉田市民が認知しているとは言えない。にもかかわらずこの取り組みが成立した理由としてはまず、楽曲をそのまま放送するのではなくメロディーのみをチャイム音で放送する形を採ったことによって、音の機能的意味が変化しなかったことが挙げられる。また、このミュージシャンが若くして亡くなったことや、生前には出身地についての思いをたびたび表明し、当地の情景を作品にも反映させていたこと、バンド名が地場産業に由来することなどが、地元メディアの報道等を通じ一種の「物語」として市民に共有されていた。さらに、同氏のファンがこの地域を「巡礼」しているという事実も見聞されていた。こうしたことが楽曲に「地域資源」としての公共性を付与したと考えることができる。

結果として、このチャイム音は時間を示す信号音であるだけでなく、共有された「物語」を想起させる標識音であり、かつ「地域資源」であるという多義的な存在となった。また、富士吉田市という共同体を象徴する音であると同時に、このミュージシャンのファンという共同体を象徴する音という意味を持つことになった。公共空間のサウンドスケープ・デザインのしかけとして、このような重層性を意図的に採用することも考えられる。

放送番組のサウンドアーカイブとしての可能性～NHK アーカイブス学術利用トライアル研究中間報告～

小林田鶴子（共栄大学）、兼古勝史（武蔵大学・立教大学）、鳥越けい子（青山学院大学）

わが国でテレビ放送が開始されてから 60 年目の節目にあたる今年は、NHK などを中心に、テレビの 60 年を振り返る様々な番組が特集され放送されている。もともとフィルムに記録され、繰り返し視聴されることを前提に制作された映画等とは異なり、誕生当初、技術的にも生放送しか出来なかったテレビは、「今」を伝えるメディアである、とよく言われる。時代時代の「今」「この瞬間」に立ち会ってきたテレビは、それゆえにこそ、私たちの日々の暮らしの特定の時間や場面に寄り添い、時代や個人史の記憶とも深く結びついている。VTR や家庭用録画機が普及した今日も、テレビのこの本質は大きくはかわっていない。

一方で「録画」の登場と普及は、テレビ番組のあり方を、「消費財」から「文化財」へと変質させてきた。放送のための素材に過ぎなかった「NHK ライブラリー」が、より一般への公開を目的とした「NHK アーカイブス」へと広がった背景には、こうしたテレビ放送に対する社会認識の変化があるといえよう。

本研究は、NHK アーカイブスの学術利用トライアル研究に応募し採択されたもので、NHK アーカイ

ブスに保管されている非公開番組を含む過去の番組資産を振り返り、主としてテレビ番組の“サウンドアーカイブ”としての側面、すなわち「音風景の記録」「耳の証人」としての可能性を検証しようとするものである。

一般に、テレビ番組においては、映像の撮影が主眼であって、音風景・音環境の記録を直接の目的とするものではない。しかし本来「視+聴」覚メディアであるテレビ番組の中には効果音や音楽だけでなく、地域の音風景が記録されているものが少なからずあると思われる。写真や絵画、動画など視覚的な風景の記録に比べて、音風景が記録される機会が極めて少ない現状の中で、テレビ番組は撮影当時の音風景を伝える貴重な記録である可能性が高い。本研究は、テレビ番組のニュースやドキュメンタリー・記録映像を中心に（ラジオ番組も補助的に使用し）、放送番組のアーカイブを「音風景が記録されたサウンドアーカイブ」として捉え直し、その可能性を検証して行くことを目指している。今回は中間報告として、本研究に至るこれまでの研究成果の報告を含む、研究のベースとなった問題意識、研究対象としての「NHK アーカイブス」の現状と課題、研究の方法論等について紹介し、皆さんのご意見ご指摘等をいただければと考えています。

建築学科の学生を対象とした環境音による空間認識の訓練の試み

飯野秋成（新潟工科大学）

建築・都市環境の設計支援ツールは、一般に、建築物や市街地の空間形状や材料、気象データなどを入力データとして、表面温度分布や気流分布、音場などを出力するブラックボックスとして機能している。このような入出力の考え方は、建築設計の実務を効率的なものとするばかりでなく、都市・建築を学ぶ学生諸氏のための環境教育ツールとしても、しばしば利用されている。本研究では、これらの設計支援ツールを都市・建築環境教育に利用する場合の有効性と限界について考察する。そして、これらの設計支援ツールとは入出力を逆の流れとすること、すなわち、空間において感じる温熱感覚、気流感、音響といった視覚以外の感覚情報から、市街地の空間形状を類推する訓練こそが、建築・都市環境の教育に求められることを指摘した。

以上の考え方ものものに、建築学科の学生複数名を対象として、市街地で収集した音の情報から空間を類推させる試みを実施した。バイノーラルマイクを使用して録音した環境音のデジタルデータ（wav ファイル、44kHz）を聞いてもらい、その音を頼りに、4 枚のパノラマ写真の中から正解の写真を 1 枚選び、番号に丸を付けてもらうことを試みた。その結果、テストの回数を重ねるとともに、正答率が上昇することなどを示した。

さらに、音源の収集地点を中心に、50m 四方の範囲の建物の配置状況の図を描き込んでもらうテストも実施した。このとき、ヒントをまったく与えない場合と、範囲内の建物の数と高さを提示した場合、の 2 通りを実施した。いずれのテストにおいても、左右の音は判断が容易である傾向がみられ、その要因としては、車や自転車、人の通る音などの直接音から道路の方向を類推することによることが明らかとなった。また、音源収集に利用したバイノーラルマイクは、耳の位置（2 点）での収集のため、原理的には音の前後関係は把握しにくいと考えられるが、実際は前後関係を正しく判断していることが多かったことを示しており、録音時にバイノーラルマイクを装着した学生の耳たぶによる方向性が、再現音に影響している可能性が考えられた。

公共空間の音環境デザインにおけるリアルタイム制御デバイスの導入

島橋和宏 (名古屋市立大学)

音環境デザインが決して盛んではない現状に対して様々な要因が考えられるが、導入のハードルの高さはそのひとつであるように思われる。具体的には、導入による効果が期待できない、技術的な面で運用がし難い、導入に踏み切るまでの予算を組む余裕が無い、ということが挙げられる。確かに従来の音環境デザインは「音響の専門家が高価な機材を導入し、培ってきた経験と技術でデザインする」というイメージが強いように思われる。

しかし、そういったいわば「演出としての音環境デザイン」の実施だけでは現状は変わらない。そこで本研究は、①導入しやすい②効果を実感できる③より身近な適用が可能である音環境デザインを目指し、その手法と考え方についての提案および実施と考察を行なう。

音環境デザインと言ってもその意味するところは幅広いが、本研究は手始めに BGM 拡声における制御を検討する。現状、公共空間への音拡散は主に BGM が使用されているからである。当然のことながら将来的に様々な場面での音制御に適用することを想定している。

本研究ではハードウェアデバイスとしてシングルボードコンピュータ Raspberry Pi を使用する。安価である点、コンパクトである点、後述のソフトウェアが問題なく動作する点を鑑みハードウェアとして採用した。次に、サウンド制御を行なうソフトウェアとして、Pure Data を採用する。音に特化したソフトウェアである点、パフォーマンスへの使用を想定しているためリアルタイムな制御を行うことに優れている点、何よりフリーソフトである点が採用の理由である。本研究はこの 2 つのデバイスの組み合わせを基本の導入形態として、音環境デザインへの適用を試みる。

博物館でのコンサート「ミュージアムジーク」の実践と可能性

松本玲子 (青山学院大学)

「ミュージアムジーク」とは、博物館で行われる音楽会であるミュージアム・コンサートにおいて、展示会のテーマや展示内容・作家・関係者および館のコンセプトや環境・歴史など、空間を含む博物館と展示・展示会に関連したプログラムや演出で行われるコンサート、およびその概念を示す筆者による造語である。博物館でおこなわれるミュージアム・コンサートは日本においては 1950 年代に戦後荒廃の中からの娯楽として開始され、その後多様化し、現在では博物館の音風景として定着してきている。しかしミュージアム・コンサートはその在り方や内容についての議論がほとんどなされないまま、それぞれの館が試行錯誤しながら開催してきたという経緯もあり、来場者から館内の音が音楽鑑賞に、音楽が展示会鑑賞にそれぞれ妨げになるといった指摘もされてきた。このような問題も含め筆者は以前からミュージアム・コンサートの内容・在り方に問題意識を持ってきた。そこで自分が演奏するミュージアム・コンサートでは様々な試みをおこないそこから発見を重ね、結果「ミュージアムジーク」という概念を提唱し実践している。

本発表ではまずミュージアム・コンサートに対して筆者がもった問題意識により、自分が演奏するミュージアム・コンサートにおいて重ねてきた試行と発見について、事例を追って示してゆく。次に筆者が取り組んできたこのようなコンサートへの考え方を「ミュージアムジーク」として成立させ提唱するに至った過程をたどる。そして最後にミュージアムジークの概念と博物館の音風景との関係について述

べたい。

ミュージアム・コンサートは音楽演奏が館のサウンドスケープと出会うことに他ならない。「ミュージアムジーク」は来場者と博物館・展覧会・館をめぐる空間や時空を超えた環境との間に新たな関係を創出するものであり、ミュージアムジークを聴くその先にはより豊かな博物館の音風景が広がっているのである。

コミュニティデザインのための「地域の音」コンテンツ制作の試み

笠川 芳久（拓殖大学）、工藤 芳彰（拓殖大学）

元来、人間の生活は、地域に根差し、独自の文化を育み、継承していくものである。しかし、現代生活においては、伝統的な地域コミュニティの弱体化が急速に進み、文化継承の基盤が失われつつある。今後、私たちが真に「豊かな生活」を獲得するためには、地域づくりの観点から、学際的で多角的なデザイン支援を継続していく必要があると考える。

以上の視点から、今回、私たちは、サウンドバムの概念とミュージック・コンクレートの手法を参考に、特定地域への関心を誘発する「地域の音」コンテンツ 3 件の制作を試みた。対象地域とコンテンツの概要は次のとおりである。

東京都八王子市の「八王子いちよう祭り」は 1979（昭和 54）年から続く市民まつりで、オリエンテーリングから大小ステージイベント、カーパレードなど多種多様なコンテンツを特徴とする。私たちは、過去 2 回のサウンドスケープ調査に取り組み、イベントの賑やかさを演出する音圧レベルの目安を同イベント実行委員会に提案してきた。その知見を踏まえ、同イベントで採集した音を編集し、公式ホームページ上で再生するための楽曲を制作した。

長野県上田市丸子地区に所在する鹿教湯温泉は、高度経済成長期の慰安旅行先として多数の滞在客を集めた小さな温泉町である。現在、旅館組合の若手を中心に、民公学による活性化の取り組みが始まっている。その一端として、同地域で採集した風呂の湯の音、川のせせらぎなどを編集し、公式ホームページ用の web コンテンツを制作した。

若年層に対する食育は、地域の食文化継承の基盤である。東京都文京区の重点施策の一つとして、2012（平成 24）年から始まった「ぶんきょうハッピーベジタブル大作戦」は、野菜の摂取率の向上を目的とする啓蒙活動である。その中核イベント「ハッピーベジタブルフェスタ」のために、野菜を囓る音、料理する音をクイズ形式に編集した iPad 用アプリケーションを制作した。以上 3 件のコンテンツは、地域イベントと観光地、食行為のそれぞれが発する音とそのつながりを追体験するものであり、ミュージック・コンクレートの手法によって、その親しみやすさを高めることを意図した。今後もさらなる検証と改良を続けたい。

Acoustic Film の方法と可能性 —"Scapes Series"を中心に—

柳沢英輔 (国立民族学博物館)

Acoustic Film とは、発表者が考えた概念で、ある特定の空間・場所の音に焦点を当てた映像作品をさす。これまでサウンドスケープを記録・表現した作品は、ある特定の空間・場所の記録としての「フィールドレコーディング」や、録音された音風景に基づいて作曲を行った「サウンドスケープ・コンポジション」のように、録音の編集・配置・再構成がその中心にあった。映像は、音に比べて視聴者に与えるインパクトが強く、また映像の中で音は副次的に扱われる事が多いため、サウンドスケープの記録・表現方法として用いられる事は少ない。確かに、録音された音は、それのみで聴く人の記憶を喚起し、「聴覚的な」想像力をもたらさう。一方、ある特定の空間・場所の音を記録したフィールドレコーディングは、その場において音を五感（身体）を通して経験した録音者と、その場にいなかった聴き手との経験の差が常につきまとう。Acoustic Film はこうした問題を解決するものではないが、サウンドスケープがある特定の場所・地域における音の認識のことをさすならば、音をそれが録音された空間や場所の映像との組み合わせにおいて提示することは、サウンドスケープの記録・表現方法として有効ではないだろうか。

本発表では、発表者の作品「Scapes Series」（2008 年製作）のほか、幾つかの作品を事例に考察する。「Scapes Series」は京都の音風景を記録した 3 つの映像作品からなる。「BambooScapes」では、京都上桂の竹林の環境音を映像とともにダミーヘッドバイノーラルマイクを用いて記録し、録音者の聴覚的な経験をリアルに再現することをめざした。「KyotoScapes」では、エアーマイクと水中マイクを併用し、音とイメージの組み合わせを時に内容をあえてずらしながら示した。最後の「UltrasonicScapes」は、街にあふれる 20kHz 以上の超高周波音をバットディテクターを使ってリアルタイムに可聴域に変換し、映像と同時に収録し制作した。つまり、映像作品中の音は、現場では人間には聞こえなかった音である。以上より、Acoustic Film の方法と可能性について考えたい。

スペシャルセッション

「音風景展をふりかえって 環境、人々、そして物語は紡がれる」

報告：大庭照代 聞き手：鳥越けい子 司会：土田義郎

- 1) 千葉県立中央博物館による音の風景展の内容紹介
- 2) 千葉県立中央博物館とその周辺的环境
- 3) 質疑・討論

※ 研究発表会終了後に、協会の 20 周年記念展の第 2 企画展示室、及び館内の喫茶「あおば」に場所を移し、情報交換会を行います。展示に至るまでの経緯や苦労を実行委員会メンバーにお聞きしたり、博物館の方からの感想をうかがったりしながら、皆で音風景の時空を共有しましょう。